

このワークは、会話におけるつぎの点への気づきを目的としています。

- 1 会話における隣接対とその意味的つながり
- 2 会話における文脈とそのテーマ性・一貫性
- 3 発話意図とその表現方法



以下、3点について説明します。

1 会話における隣接対とその意味的つながり

[隣接対]とは、「昨日、どこ行った?」「図書館行った」のような、“やりとりを構成する連続した2つの発話”を指します。この隣接対には、前半部と後半部があり、多くの場合、前半部が相手に対する質問、後半部がそれに対する応答、という形をとります。しかしその他にも、「ただいま」(挨拶)→「おかえり」(挨拶)、「お金拾ったよ」(報告)→「見せて」(要請)、「トランプしない?」→「何するの?」→「ばばぬき」→「やらない」(隣接対挿入)など、さまざまなパターンがありますが、共通しているのは、話者交代(ターン・テイキング)のシステムと、話者の発話の意味的つながりです。会話における隣接対の存在と、質問-応答を基軸とした意味的つながりへの気づきが、このワークの目的のひとつです。

2 会話における文脈とそのテーマ性・一貫性

ワークの問題に解答する場合、隣接対における意味的つながりを考えることがまず必要となりますが、それだけでは不十分です。例えば、「遊ぼうよ?」→「いいよ。何する?」→「(解答部分)」という問題の場合、「宿題やろうよ」という解答は、「何する?」という直前の問いかけへの応答条件は満たしていますが、「遊ぼうよ」という冒頭の発話からの流れに適したものではありません。“遊び”の条件を満たすような「ゲームしようよ」のようなセリフが正答となります。このような会話の流れ=[文脈]の存在に気づき、またそこにあるテーマ性・一貫性に対する気づきを促すことも、ワークの目的のひとつです。

3 発話意図とその表現方法

会話では、相手のことばを文字通りには受け取れない場面が多くあります。たとえば、「消しゴム、持ってる?」という問いかけは、婉曲な表現で、“消しゴムを貸してほしい”という要請を表しています。このような、ことばの奥にある発話者の意図を洞察することができなければ、日常会話は成立しません。会話における発話意図の存在に気づき、その表現方法に触れることも、ワークの目的です。

《解答についての考え方》

上記の1~3のうち、とくに会話における文脈や発話意図の理解は、発達に未熟さを持つ子どもにとって非常に困難な課題だと思います。本来は直感であり、自然習得すべきものですが、今回、学習教材として、このワークを作ったのは、子どもが少しでもそれらの存在に気づき、限定的にでも日常会話の理解・運用に生かせれば、と考えたためです。問題に正答することよりも、ワークへの取り組みを通して会話というものを意識化すること、そして、自然で適切な会話にたくさん触れること、が大切だと考えています。